

金子氏、モリス大使と会見

日米船鉄交換同盟史（大正九年
発行）より抜萃、武藤作次氏提供

第二提案又失敗に終りたるを以て今まで静かに形勢を觀望し居たる金子直吉氏は心密かに期する所あり、三月十七日夜神戸より上京し翌朝停車場ホテルの一室に浅野氏、町田氏、西川氏、長崎氏、南氏等の來集を求め、氏の意中を述べて曰く、「予は密かに期する所あり、本日直ちにモリス大使に会見せんと欲す。諸君希くば此の会見を予に一任せられんことを」と、諸氏之を諾す。依て直ちに大使館に電話して会見の時刻を定め、転じて内務大臣後藤新平男に紹介状を与えられんことを乞いたるに、男は此の日陛下葉山より還幸あらせらるるに際し奉迎のため多忙なりしを以て鶴見秘書官代筆し、「金子氏は船と鉄との問題を解決するに最も適當の地位に在る人なれば特別に引見せられ其の云う所に御傾聴あらんことを乞う」との意を述べたる紹介状を与えたり。

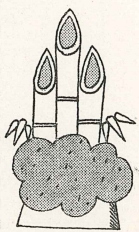
是より先金子氏はモリス大使の閥歴及び為人を聞き其の所謂尋常一様の外交官にあらざるを知り深く之を尊敬し、多年外人相手の商談に於ける自己の経験したる所に照して、誠意を以て対すれば必ず彼れを動かし得べしとの確信を有し、一通の外国電報を懐にして上京したるなり。

偕て定刻午前十一時に米國大使館に於て両氏始めて会見したるが、モリス大使はかの紹介状に依りて多大の敬意を以て金子氏を迎え、一見直ちに旧知の如く何等城府を設けずして互に虚心淡懷の談話を交えたり。金子氏曰く、「現今日本に於て最も大なる造船能力を有し且米國政府に向つて提供し得べき最も多くの船舶を有するは川崎造船所なり、而して其の社長松方幸次郎氏は現にロンドンに在りて今回の船鉄交換談に對し

ては頗る強硬なる意見を有し、即ち条件を是くの如く指定し來れり、

と懷中より携え來れる電報を出し、而も此の指定は日本海運界の現状に照して不当の要求にあらず、然るに我々は尚も譲歩して松方氏主張の条件よりも低下して提案せる次第なり、即ち曩に通信省を経て提案せし所と本電報とを對照せられれば予の言の虚ならざるを知りたまうべし。希くは我々の誠意を諒とせられ更に考慮せられんことを」と、右の電報を其の儘大使に提示したれば、大使は金子氏の誠意ある言辭と公明なる態度に動かされしもの如く、松方氏の電報を熟読して急に館内の下僚を呼び集め、金子氏の目前にて種々協議を凝らしたり。稍やありて大使は「遺憾乍ら米國政府の予期する所と甚だしき逕庭あるを以て如何とも為し難し」と答う。金子氏は予て今日までの経過を熟視せるに彼は我よりの提案を求めて而して毎回之を斥げ來れり、斯くては何時まで繰返すも甲斐なし、又我は譲歩に譲歩を重ね往くだけつ不利に陥るなり、如かず単刀直入彼より棄案せしむるの得策なるには、而して此に導びき來らんことが抑も金子氏会見の目的たりしなり。

此に於てか金子氏形を改め曰く、「然らば事此に至つては最早絶望の外なきが如し、然れども全然施すべき途絶えたるにはあらず、川崎造船所は株式会社にして松方社長以外尚川崎副社長以下の重役あり、此等の重役にして議一致せば必ずしも松方社長をして其の議に従わしめ得べからざるにはあらず、如何せん重役会に附すべき議題の未だ与えられざるを、希くは閣下より其の議に附すべき米國政府の提案を示されんことを」と。モリス大使曰く、「諾矣、早速本國政府に打電して其の回答を俟つべし、其の上更に会見の日を定めん」と。果然金子氏の目的は達したり。此の際に於るモリス氏の明敏果斷は世の官僚政治家に見るを得ざる所にして、のち頭本氏事の序でにモリス氏に向つて之を挙げて推稱したるに氏は大いに喜びたりと。



浪華倉庫と帝人事件 (一)

広岡一男

我々の居城鈴木商店の破綻に、私達は皆無念の血涙をのんだのであるが、以来、帝國人絹・神戸製鋼をはじめ鈴木商店直系会社の株式は、その大部分が台湾銀行の手に移った。これら多数の株式を処理するため、台銀では特に整理課を設置して、これを担当させることになった。浪華倉庫（資本金三百万円）の全株式も台銀の手に移り、浪華倉庫は台銀の支配下に置かれることになった。

台銀では先ず、重役として岡田諭介・妹尾光太郎両氏を、経理部長として辰馬尚次郎氏を派遣し、ほかに社員数名をも出向せしめた。台銀としては当然の措置であつたが、しかし私達社員としては余り好い気持はしなかつた。もっとも、営業面では何等の拘束もうけなかつた。私達は前途に一抹の不安をいだきながらも、一致協力して日常の仕事に励んだ。幸いに、業況も順調に推移した。

こうした状況で数年が過ぎていった。我国内外の情勢も大きく旋回しつつあつた。

昭和六年春、私は浪華倉庫下関支店長として初めて東京丸の内の台湾銀行を訪れた。緊張に胸をドキドキさせながら、先ず整理課長越藤恒吉氏の前に立った。浪華倉庫活自在の権を握っている人である。加うるに、銀行マンには珍しく豪快な風采と堂々たる貫禄に圧倒される思いであつたが、私は臍下丹田に力を入れて挨拶を述べ、次いで下関支店の業況を報告した。

ところが、越藤課長の態度は意外なほど好意的で、私の報告をうなずきながら聞き終ると、

「これからも確かりやってくれ給え。」と励まされ、高木理事・柳田直吉理事・岡崎秘書課長に紹介までして下さつた。私は目頭が熱くなる程嬉しかつた。越藤さんは五十才前後だつたらうか、私は三十三であつたが、何だか学校の先輩のような親しき、有難さを覚えた。

私は大阪本社の命で往訪したのであつたが、使命を果たすことができ、本当にほっとした。

その後も、私は王子製紙・帝國製糖・昭和製糖・新竹製糖・三菱商事など京得意先を訪問するため、毎年春秋に上京したが、その都度台銀を訪ずれ、越藤さんに会ふのを楽しみに思うようにさえた。

これは後年、島崎直幹さん（浪華倉庫専務取締役）から聞いたことであるが、当時若輩の私が下関支店長に任じられたのも、越藤・島崎両氏の話合いによつたものだとのことである。

昭和九年の春、天下を震撼させた「帝人事件」が起り、台銀の島田頭取・高木理事・柳田理事・岡崎課長と共に越藤課長も検査されたのである。私は大きなショックをうけた。

台銀の手によつて、浪華倉庫が渋沢倉庫に買収されたのは、その直前である。

若しも「帝人事件」の起るのがもう半年も早かつたら、浪華倉庫の運命は果してどうなつていたであらうか。若しまた台銀と渋沢倉庫との売買交渉が難航し、荏苒月日を経過していたら、帝人事件の勃発によつてこの商談は打ち切りになつたに違いない。

ところが幸か不幸か、台銀の高木理事と第一銀行副頭取で兼ねて渋沢倉庫取締役会長の明石照男氏とは非常に親しい友人の間柄であり、且つ後で詳しく述べる如く、渋沢倉庫にとっては絶好の買物だったので、両者間の折衝は極めてスムーズに進捗し、昭和八年十一月に売買契約が調印されたのである。人生には誰しも「若しもあの場合……であつたならば」というケースが一度や二度はあるものであるが、それは会社に於て

も同様である。若しも「帝人事件」の勃発が数ヶ月早かったら、浪華倉庫の歴史も、私達社員の人生も大きく変っていた筈である。

(次号につづく)

あとがき

鈴木商店傘下の直系会社のうちでも、浪華倉庫は最も地味で目立たない存在であった。従って、浪華倉庫がその後どうなったか、また社員達はどうしたか等について知っている方は極めて少ないのではないかと思ふ。

私は、かねてから、それを書き残して置きたいと考えていた。そして今度やっとペンを執って書きはじめたのであるが、紙数の制約もあり、その詳細は次号に譲ることとした。ご諒承を乞う。

製糖の沿革

一、はじめに

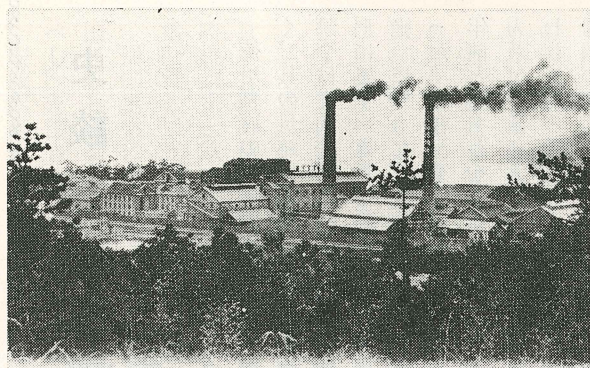
▽金子直吉と湯浅竹之助

日本製糖工業の歴史を読むとき、鬨魂たくましい二人の神戸商人の姿が浮きぼりにされてくるのは愉快である。一人は鈴木商店の金子直吉であり、もう一人は湯浅商会を起した湯浅竹之助である。

金子は明治三六年に福岡県大里に大里製糖所を起した。「金子直吉伝」によると、製糖工業には水質と水量の如何が基本的な条件になる。そのうえ海上輸送に便利で、当時のただ一つのエネルギーである石炭の入手に便利であるという立地条件を備える必要がある。金子はこうした場所をみずから探し求めて、ついに大里の大川尻に白羽の矢を立てたというが、大里といえば、別にみるように金子が後に製粉工場を建てた場

操業を開始した。溶糖能力は一〇〇英トンに達したが、これは年額八〇万ピクルの精糖能力にあたるものであった。第二工場はさらに拡張されて、大正九年七月には能力二五〇英トンにおよび、神戸は糖業界で日本有数の地位を確保したのである。

日華事変から第二次大戦中の業界の歩みは省略しなければならぬが、戦争による苦難の道は他の産業のそれとほとんど変りはなかった。神戸工場は昭和一八年一二月、企業整備令によって閉止された。機械設備は南方占領地域で現地操業をおこなうというたてまえで、その大部分が神戸港から占領地に向けて船積みされた。だが、そのときは日本の敗色はすでに明らかとなっており、積載した船舶は米軍によって空しく途中の海底深く沈められてしまった。一方、神戸工場は昭和二〇年三月一七日のB29の無差別爆撃によって焼失したが、それは続いて加えられた六月五日の大爆撃とあわせて、神戸市の大半を壊滅に陥れ入れた戦災史の中のひとコマであるに過ぎなかった。



全所製糖株式会社

景

全所の製糖工場は、旧台湾製糖が内地に残した重要な施設であったため、新会社はときを移さずこの工場の復旧に着手したが、戦後の悪条件にさらされたが、その過程は必ずしも順調ではなかった。神戸工場が操業を開始したのは昭和二五年五月であり、以来設備の近

景の全所の製糖工場は、旧台湾製糖が内地に残した重要な施設であったため、新会社はときを移さずこの工場の復旧に着手したが、戦後の悪条件にさらされたが、その過程は必ずしも順調ではなかった。神戸工場が操業を開始したのは昭和二五年五月であり、以来設備の近

所でもある。この二つの企業はいずれも間もなく他に身売りされているが、両者とも鈴木商店が貿易商として三井、三菱を向うに回して世界市場を舞台に縦横活躍を遂げた有力な背後の支えとなった。鈴木商店は、のちに日本の基幹産業となった鉄鋼、造船、人造絹糸その他の領域で、先駆的な役割を果たしたことは、あまねく知られているが、大里製糖所もその一環として記録に値する存在だったのである。大里製糖所は、明治四〇年八月、大日本製糖に六五〇万円という当時異常の高値で売渡されたが、鈴木と日本製糖との関係は、以上の輸入原糖の精製事業だけにとどまらず、さらに台湾の製糖工業にも大きな足跡を残した。すなわち、台湾の東洋製糖会社は、事実上鈴木商店の支配下に属したが、この会社は鈴木没落と運命をともにして大日本製糖に併合されたのである。

湯浅竹之助は、のちに神戸に増田製粉所を設立した横浜の豪商増田蔵商店へてっち奉公し、砂糖の商売を身につけた。明治十一年に独立の志を抱いて神戸に移り、同三四年に湯浅商会を創設して同じ商売をはじめたが、同三六年一〇月、資本金一〇〇万円で湯浅製糖所を創立した。工場は東尻池村(現長田区東尻池町)に建設し、同四一年二月に神戸精糖所と改名、操業した。能力は八〇英トンであった。この会社は、当時大日本精製糖会社と、横浜に設立された横浜精糖会社とともに、輸入原糖による精製糖業界の日本における三社時代を形成したが、明治四四年六月に台湾製糖会社に合併された。戦災で焼けてしまったが、神戸の山手に建てられた洋風の建物は市民の間で「湯浅御殿」とよばれ、彼の實力を示すものである。

二、神戸製糖工業の過去と現状

▽台糖神戸工場

神戸の製糖工業は、神戸精糖所とそれを買収した台湾製糖が、それと同社神戸工場として、明治四五年二月から溶糖を開始したことから本格化したわけである。第二工場は大正五年六月、第一工場に接して完成、

代化を完了し、現在は骨炭炉過法による清浄設備をそなえ日産六一〇トンの能力を保有するにいたった。

この間神戸工場は、戦時中から研究を重ねていたペニシリンの工業化を進め、のちにアメリカのファイザー社と技術提携をおこない、昭和三〇年六月に「台糖ファイザー株式会社」となって独立し、現在神戸の異色ある医薬品メーカーの地位を占めている。

▽名古屋製糖神戸工場

戦争によって、いちじるしく荒廃した神戸港の機能は戦前をしのぐ状況にまで発展したのは周知の事実であるが、築港の進展にともない、新たに造成された本部臨海工業地帯に進出したのが名古屋製糖会社神戸工場である。名古屋製糖会社は、昭和二一年名古屋市に創設されたが、神戸工場ができたのは昭和二九年三月であった。能力は日産七八五トンという大規模のものであり、しかも新設工場だけに設備の近代化も十分にとり入れられた。神戸西部地帯に比べて、その立地的有利性も確保されている。かくして戦後の神戸製糖工業は、名古屋製糖工場の進出によって、いちじるしくその水準を高めたといえることができる。砂糖の統制が廃止され、自由販売が許されたのは昭和二十七年の四月であったが、この事実が製糖各社の設備拡張を大いに刺激した。その後日本の貿易および為替の自由化の線にそって、昭和三八年八月には、原糖輸入自由化が実現したが、こうした事実が重なって、各社の原糖輸入は激増し、業界は生産過剰の重荷を背負い込むことになった。そこで不況カルテルを結成して、苦境の脱出をはかったが、容易にその効果をあげることができず、過剰設備の整理は業界の当面する重要課題となって現在にいたっている。

(カットは大正時代の風刺マンガ)

ママは作家でパパは子守、女性上位は今とかわらず)

